

リオ オリンピック・パラリンピック視察報告（その1）

概要

都議自民党ではリオデジャネイロ・オリンピック・パラリンピック視察団として3回に渡り9名を派遣した。8月3日から9日の日程で第一弾として高島なおき、吉原修、山崎一輝の3名がオリンピック開会式を含む視察を行ってきた。治安を不安視する声もある中、ブラジル政府は8万5千人の警察・軍関係者を動員し厳重な警備を行い、視察団は危険を感じる事はなかった。

リオ市内の主要会場を結ぶ道路網には、大会開催時の専用レーンが設けられ、このレーンを走行するためには、リオ組織委員会が発行する許可証（VAPPs）が必要であり、許可証が無い車両が専用レーンに進入した場合には罰金が科される仕組みとなっていた。恒常的に渋滞が激しいリオ市内に専用レーンを設けたことで、渋滞には更なる拍車がかかった。開会式では会場となったマラカナン競技場付近は車両規制が行われたため、主要アクセスは地下鉄2号線のマラカナン駅もしくはサン・クリストヴァン駅からの徒歩（ともに5分ほど）。改札には非接触型ICカードが用いられていたが、閉会後は混雑解消のために改札が開放され、ICカードなしで乗車することができた。

安全対策

ブラジル政府は8万5千人の警察・軍関係者を動員し厳重な警備を行った。また、コマンドコントロールセンター（CICC）、都市オペレーションセンター（COR）、医療衛生統括オペレーションセンター（CIOCS）の3センターが連携する警備・防災体制が敷かれていた。いずれのセンターも監視カメラを有効に活用していた。

コマンドコントロールセンター CICC(Centro Integrado de Comando e Controle)

- ・治安状況の把握を目的に、リオデジャネイロ州が設置（2013年業務を開始）
- ・約460台のカメラで監視し、1,200人の職員が24時間体制で勤務
- ・オリンピック期間中は、2,080人に規模を拡大
- ・社会防衛、危機管理、コマンドセンターという3つの機能を統合センターからオペレーションする。



<CICC 受付>



<カメラ画像をマルチモニターで監視>



<緊急時には併設するスペースから指令>



<中央のモニターでは警察車両等の位置がリアルタイムで把握できる>

都市オペレーションセンター COR(Centro de Operacoes Rio)

- ・ 2010 年、豪雨で多くの死傷者が発生した事案を踏まえ、都市に関する情報を一元的に集約することを目的に設置（2010 年 12 月業務を開始）
- ・ 約 920 台のカメラで監視し、42 人の職員が配置
- ・ 約 30 の関係機関の責任者が必要に応じて集まり、情報を統合し関係機関に送るという業務を担う。
- ・ 主な業務は、洪水予測、交通監視、オリンピックレーン、ボランティア活動状況、鉄道地下鉄・BRT の管理・ファバーラのモニタリング 等



<オペレーションルーム>



<渋滞状況もリアルタイムに監視>

医療衛生統括オペレーションセンター

CIOCS(Centro Integrado de Operacoes Conjuntas da Saude)

- ・ 政府・州・市の合同で大会の医療提供システムを運営
- ・ 感染症発生、テロ、災害時には医療機関の選択・調整を行う
- ・ 市内の各病院、ベニユー、ホテル、ライブサイト、港、空港などの状況を 24 時間体制でモニタリングしている。
- ・ オリンピック用として救急車を 146 台運用、通常期も使用する予定



<情報を集約している様子>



<それぞれの担当で地区ごとに監視>

開会式

会場となったマラカナン競技場付近は車両規制が行われたため、主要アクセスは地下鉄 2 号線のマラカナン駅もしくはサン・クリストヴァン駅からの徒歩（ともに 5 分ほど）。改札には非接触型 IC カードが用いられていたが、閉会後は混雑解消のために改札が開放され、IC カードなしで乗車することができた。入場の際には軍による厳重なセキュリティチェックが行われた。



<地下鉄 2 号線>



<ラッピングされた車両>



<軍によるセキュリティチェック>



<セキュリティチェック通過後>



<開会式スタート>



<超満員のスタジアム内>



<各国選手団入場>



<開会式終盤>



<混雑するサウクリストヴァン駅周辺>

選手村

選手村入場の際にはセキュリティーチェックが行われた。選手村の中の食堂のセキュリティーは厳しく、手荷物の持込が禁止されておりカバン類は全てクロークに預ける事が求められた。選手村内では全選手にタブレット端末が支給され、全ての競技・種目に関する情報（スケジュール変更など）の情報が得られるようになっていた。主要国は自国からの荷物をコンテナにて輸送をして各宿泊棟の付近に設置していた。また、毎朝、各国の監督により選手村利用の向上等について会議が開催されていた。



＜入村にあたっては、選手も含め厳重なセキュリティーチェックを実施＞



＜村内にも軍関係者を配置し警備＞



＜VISA ATMサービス＞



＜クリーニングが必要な衣類は、ベッド中央の黒い袋に入れておくシステム＞



＜選手村内輸送システム＞



<メインダイニングホール>



フードステーション
では、ブラジル料理
世界各国の伝統料理

ピザ及びパスタ
ハラル認証に従い
準備・調理された
食事などが提供



<トレーニングルーム>



<宿泊棟には国旗などが掲げられている>



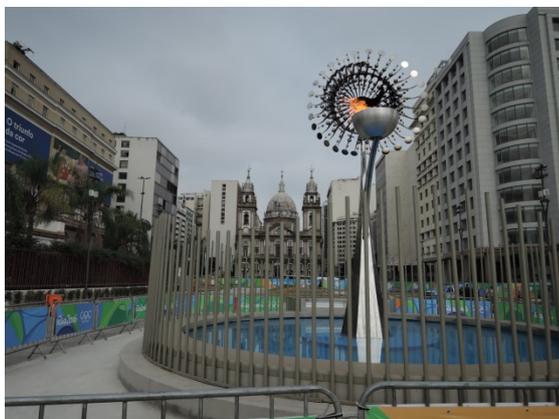
<選手のパフォーマンスを分析>



<選手のリラックススペース>

聖火台

夏季オリンピックでは初の試みとして、聖火台は開会式の翌日にマラカナン競技場から港湾地区にあるポートマラビーニャの市街地に移設された。



<市街地に設置された聖火台>

ジャパンハウス

2020年東京オリンピック・パラリンピック、2019年ラグビーワールドカップといったスポーツイベントに加え、燃料電池車などの日本の技術や日本食を含めた文化、東京都を含めた47都道府県の観光PRが行われた。



<ジャパンハウス展示物①>



<ジャパンハウス展示物②>



<テープカットの様子>



<レセプションにはIOCバツハ会長、コーツ副会長も来訪>

リオ2016オリンピック(開会式) 視察経費(3名分)

費目	金額(千円)
航空運賃(往復)	5,225
宿泊ホテル代	1,537
チケット代	800
車両借上代(現地)	1,179
合 計	8,741